

お楽しみはこれからだ 2020

片本宏茂（市内ブロック）



★映画好きのイラストレーター和田誠さんが、覚えている映画の名セリフをイラスト入りで綴っていく本（①）。映画雑誌の「キネマ旬報」に連載されていたものを書籍化した。1つの映画を見開き2ページで取り上げていて読みやすい。イラストで描かれた映画のシーンや和田さんが気になったセリフがおもしろく4巻まである。自分が覚えているセリフがあるとうれしくなり、その映画を観ていなくても映画の世界に入っていくことができる本だ。

★載っているのは洋画がほとんどだけど、その中にある黒澤明の「七人の侍」のセリフ。野武士に襲われる村を守る為に百姓たちを組織し戦うリーダーの勘兵衛がラストで「勝ったのは百姓たちだ。俺たちではない。」と言う。共に戦った者が死ぬという現実しか残らない武士の悲哀と、勝った後にその土地に根を張り生活を豊かにしていく百姓たちの力強さを対比して、生きることの意味を問いかける。戦いを終えた勘兵衛にすれば、自分は侍として戦う事しかできず、侍であり続けるしかないことを思いつぶやく、あまりにも有名なセリフ。（①）（②）

もう一つ、黒澤明の「生きる」のセリフが載っている。末期癌により余命幾許もない主人公の渡辺が言うセリフが載っているのだが、そのセリフもいいのだけど、「生きる」で思い起こすのは、渡辺が生きる意味に気づくシーン（③）。死への恐怖を紛らすために快樂を求め町を彷徨う渡辺が、若い元同僚と喫茶店で話すことになる。生き生きとしている彼女に「何か作ってみたいら」と言われ、初めは「もう…遅い」と言っていた渡辺が「いや遅くはない、無理じゃない…ただ、やる気になれば…」とつぶやき、その喫茶店をよろめきながらだがまっすぐに前を見て「私にも…なにか出来る…私にも…なにか…」とつぶやき店を出ていく。そのとき他の席ではたまたま誕生会をしていて若者たちが「ハッピーバースデー」を歌う。その歌声の中を憑かれたように出ていく。見ず知らずの若者たちの歌を重ねることで生きる意味をつかんだ渡辺の誕生（再生）を印象づける名シーンだ。「消費」することは生き続ける上で重要な事だが、生きる意味を問うには「創造」ということも重要な視点なのだという事を黒澤は表現する。

★家にある本を見ていると、内容を思い出すことの他に、その本にまつわることを思い出す本がある。夢中になって読んだ本がある。梅田に清風堂という本屋があり、そこでしか売ってなかった本があった。全部で10巻もある本だが、一度には買えないので1巻ずつわざわざ梅田まで買いに行った。買ったらもちろんすぐに読み始める。梅田から地下鉄で西田辺まで20分くらいあるが、西田辺で降りるまでずっと車内で読んでいる。駅に着いてもまだ読み終わってない。家に帰ってからゆっくりと読めばいいのだけど夢中になっているので本を閉じることができない。駅から出ずにホームのベンチに座って最後まで読んだ。その時のホームの雰囲気、寒さ、ベンチの座り心地まではっきりと覚えている。こんなにも夢中になって読んだ本はあまりない。

その本というのは、沖縄の高校生たちが野球で甲子園をめざす話を漫画化したもの（④）。ストーリーは単純なスポ根ものようだが、高校生たちは沖縄の「聴覚障害児」たちだ。東京オリンピックが開催された頃アメリカに風疹が大流行しアメリカ軍の基地がある沖縄にも風疹が流行った。風疹に罹った妊婦から生まれた子に聴覚に障害があった。ここまできると普通のスポ根ではなくなる。当時、甲子園に出場できるのは「普通」高校であって聴覚障害学校は連盟にさえ加盟できなかった。そんな状況の中、高校生たちと彼らを支える人々は甲子園出場をめざすのである。彼らは「やっぱり俺たちは、生まれてこない方がよかったんだ」と幾度も自暴自棄になりかける。そのときコーチでもある先生が「たしかに野球憲章の壁は厚い。しかしその壁に穴をあけることも不可能じゃないはずだ。そして壁に穴をあける仕草は手話では『努力』という言葉を表す」と励ます。野球をしたい。甲子園に出たい。「やりたい



ことをする」だけではやりきることはできない。高校生たちにとって甲子園の出場権を得ることが「創造＝壁に穴をあける」であり、そこに「生きる」があってこそ闘い続けることができるのだということを教えてくれた本である。夢中になって、熱くなって、寒く冷たいベンチで読んでいた頃を、この本の表紙を見ると思い出す。若かったな～。

★もう一冊。

時間があると本屋を巡る（本屋のはしご）。本を眺めているだけでも楽しい。ある時、平積みになっていて目に付いた本があったのだけど、題名が真っ直ぐすぎて買わずに帰った。数日過ぎて、別の本屋でも、また目に付いた。何かの縁かと思い買って帰ったのが（⑤）。映画好きの主人公とその父親が「キネマの神様」との関りを通して映画本来の意味を問うていく話。文中のセリフ。「映画は旅である」「この世に映画がある限り、人々は映画館に出かけていくだろう」「自分の行ったことがない世界がたっぷりと詰まっている。」「体験したことがない幾多の人生がある」などなど。本に出てくる映画は「ニューシネマパラダイス」「フィールドオブドリームス」「七人の侍」「硫黄島からの手紙」などなど。父と娘の関係、アメリカの有名映画評論家と映画好きの父親の交流、映画雑誌社とシネマコンプレックス企業のやり取りなどの話を経て、最後は評論家と父親が「人生最良の映画」と呼ぶ映画が上映されるシーンで終わる。映画の題名は書かれていない。映画を見ていないとわからないようになっている。「お楽しみはこれからだ」

★この本を山田洋次が映画化すると聞いて、本を買ったときの縁をさらに深めてしまった。（この本を読みましょと誰かがささやいているのか。危ない危ない…）。山田洋次は「男はつらいよ」で有名だけど、「家族」「故郷」「同胞」「息子」「学校」など「二字熟語」シリーズ（と私が勝手に呼んでいる）も名作だ。あの名作「砂の器」の共同脚本も手がけている（共同脚本しているのは橋本忍。橋本は「七人の侍」「生きる」の脚本を手がけている）。映画「砂の器」は、最後30分の、村を追われた親子と殺人事件捜査と主人公が指揮する交響曲「宿命」の演奏の3つが重なって進行するというクライマックスシーンが見せ場だけど、実は松本清張の原作にはこの場面は無い。わずかに数行しか書かれていないものを脚色したのである。映画というのは原作を忠実に表現する時と、原作から導き出し、映画製作者独自のものに仕上げていくことがあるのだと、その時に知った。

山田は何故この「キネマの神様」を映画化しようと考えたのだろう。⑥では、山田が映画に出会った頃のエピソードが書いてある。父親の仕事で満州で育った山田は女中のふみさんと映画を観に行く。その時、映画を観ていたふみさんは映画に没入して自分ごとに重ね合わせて泣きながら見るのである。映画と自分が一体となる。そんな映画の観方があるのだと山田少年が気づく話が載っている。

一方⑤では、主人公の父親が幼いころ「キネマの神様」に出会う場面が書かれている。南満州鉄道の技師であった父に連れられ映画をよく観た父親は、父に黙って中国人の女の子を映画館に連れて行く。そのことを叱られた父親は「キネマの神様」に中国人の女の子にも映画をたくさん観れるようにしてほしいと願う。

映画の観方を発見する⑤と、映画の神様と出会う⑥の話の一致は偶然だろうか？ また縁を感じてしまうのだ。（危ない、危ない…）

★この本を原作にして、山田洋次が、原作のどの部分を自分なりに解釈し、自分の映画として作り上げるか（創造するか）楽しみだ。この父親役に抜擢されたのがコロナ禍で亡くなった志村けんだった。映画を愛する自堕落な父親役を山田はどう演出し、志村はどう演じるのかぜひ観たかったのでとても残念。

★「キネマの神様」の公開は2021年4月。「お楽しみはこれからだ」

そのころには、コロナ禍が収束して、本屋や映画館に自由に外出したいものだ。まだまだ「お楽しみはこれからだ」

①「お楽しみはこれからだ」（1～4）和田誠 文芸春秋 1978

②「黒澤明と『七人の侍』」都築政昭 朝日ソノラマ 1999

③「脚本・日本映画の名作」佐藤忠男編 風濤社 1975

④「遙かなる甲子園」①～⑩ 山本おさむ 双葉社 1988

⑤「キネマの神様」原田マハ 文春文庫 2011

⑥「映画をつくる」山田洋次 大月書店 1978